



「総合的な探究の時間」に生きる「国語表現」の授業実践 : 教科横断の視点から探究的な学びをつくる

勝部, 尚樹

(Citation)

兵庫國漢, 67:11-30

(Issue Date)

2021-03

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

発行元の許可を得て登録しています。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495804>



「総合的な探究の時間」に生きる「国語表現」の授業実践

―教科横断の視点から探究的な学びをつくる―

兵庫県立武庫荘総合高等学校 勝 部 尚 樹

I はじめに

本稿は総合的な探究の時間と関連づけた国語表現の授業実践報告である。授業で生徒が身につけた力は、その科目のみで完結するのではなく、他教科・他科目での学習や将来に活かしてほしいと願っている。授業で身につけた資質・能力をもとに、生涯にわたって探究してほしい。筆者は令和元年度、総合的な探究の時間のカリキュラムデザインと授業運営をおこなう立場にあったが、総合的な探究の時間における資質・能力の育成に対する国語科の役割は非常に大きいと感じている。

令和四年度より全面实施となる新学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントの観点から教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成が重視され¹、国語科では言語力の育成を図ることが期待されている。また教育課程の軸に位置づけられる総合的な探究の時間では、各教科・科目で育成する資質・能力と関連付け²ること、各教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に活用することが求められている。

国語科における教科横断の視点による授業や、総合的な探究（学習）の時間と関連した授業についての先行研究には次のようなものが

ある。井上雅彦は「総合的な学習の時間が有効に機能するためには、国語科が重要な役割を担っている」として、国語科と総合的な学習の時間の連携を考察している。八田幸恵、渡邊久暢は現代文の「こころ論文」の実践において、探究を導く「問い」を自立して設定する能力を形成する道筋を提案している³。井上志音は灘中学校・高等学校において、国際バカロレア（IB）の「知の理論（TOK）」の考え方を援用しながら、教科横断を導入した国語科における探究学習を実践している⁵。

表現の指導については、兵庫県高等学校教育研究会国語部会が一九九五年に『自己をひらく表現指導』（右文書院）を発刊しているが、田中宏幸が指摘するように、国語表現に関する年間を通した学習指導記録や実践報告の数は多くない⁶。

本稿で述べる実践は国語表現におけるものである。中央教育審議会の答申で指摘されているように⁷、高等学校の国語教育では表現の指導が課題となっている。新科目「現代の国語」「論理国語」等では「話すこと・聞くこと」「書くこと」の授業時数が拡充し、「国語表現」の標準単位は一単位増えて四単位となっている。国語科における表現力

の育成はこれまで以上に求められている。

以上をふまえて、本稿では特に三つの単元を取り上げ、教科横断の視点から総合的な探究の時間と関連づけた国語表現の年間の授業実践について述べる。本実践の内容は国語表現のみならず、「現代の国語」「論理国語」等にも活かすことができると考えている。

Ⅱ 授業の概要とねらい

兵庫県立武庫荘総合高等学校における授業の概要を述べる。

一 国語表現の授業概要

まず、実践内容である国語表現（二単位）の授業概要を述べる。

- ・対象 総合学科二年次（授業選択者二八名×三講座、合計八四名）
- ・期間 令和元年四月～令和二年三月
- ・使用教科書 大修館書店『国語表現 改訂版』
- ・学習目標

①社会に目を向けて、情報を収集し、探究のプロセスに基づいて、自分の考えを論理的にまとめることができる。

②社会の課題を解決するために、論理性を判断しながら話し合ったり、表現したりすることができる。

③自己のキャリアと結びつけながら、言葉遣い、文体などの表現を工夫して、自分の考えを効果的に伝えることができる。

④表現を互いに批評しあいしながら、自分の表現や推敲に役立たせることができる。

⑤語彙力をつけ、表現の特色や言語の役割を理解することができる。

・年間の学習活動

大まかには次の三つの時期に分けて授業を展開した。太字は本稿で詳細に述べる単元である。（年間指導表は【資料1】を参照。）

《四月～七月 表現の基礎を身につける》

・スピーチ、エッセー、小論文で表現の基礎を身につける。

（題材はニュージーランド修学旅行に合わせたもの。）

・ポスターセッションでニュージーランドについて発表する。

（講座内発表会のあと、校内の教職員を招いて、代表者による講座合同のポスターセッションを実施。）

《九月～一月 社会に目を向けて表現する》

・社会問題プレゼンテーション

・新聞投書

・ディベート

・新書ビブリオバトル

（自分の興味・関心のある分野、進路に関連のある分野の新書に限定して、ビブリオバトルを実施する。）

《一～二月 自己のキャリアを表現する》

・自己PR文作成

・模擬面接

・志望動機書作成

二 総合的な探究の時間（二年次）の授業概要

次に、総合的な探究の時間の概要を述べる。学習指導要領改訂に伴い令和元年度には総合的な探究の時間が先行実施となっており、全国の高等学校で探究活動が本格的に実施されている。しかし総合学科では平成六年度設置以来、課題研究が原則必修科目となっており、本校でも平成一五年度の開校以来、総合的な学習の時間で探究学習をおこなっている。その指導の蓄積を活かしつつ、令和元年度の先行実施を前にして、より充実した探究学習となるように授業内容を変更した。対象生徒はその授業を受けている。

・対象 総合学科二年次¹⁾（一単位）（三年次（二単位）も継続）

・使用テキスト 『総合的な探究の時間 探究ガイドブック』¹¹⁾

・学習目標

① 課題の発見と解決に必要な知識・技能を身につけることができる。

（知識・技能）

② 自分と社会の関わりから、自ら探究課題（問い）を立て、その課題を解決するために、情報を集め、整理・分析し、まとめ・発表をすることができる。（思考・判断・表現）

③ 主体的・協働的に探究活動をおこない、生涯にわたって探究しようとする態度を身につけることができる。（主体的に学習に取り組む態度）

・年間の学習活動

① 自分の興味・関心や社会で問題となっていることから研究テーマを設定する。配属されたゼミで活動を進める。

② 研究計画をたて、文献調査、インタビュー調査、アンケート調査、観察・実験などの調査活動に取り組む。調査結果を分析する。

③ 研究成果を発表する。

④ 論文（二年次では二〇〇〇字程度）にまとめる。

三 授業デザインのポイント

国語表現の授業では、次の四点について特に工夫した。

① 国語表現と総合的な探究の時間との教科連携を図ること

本稿の要点である。国語表現の学習活動のうち、総合的な探究の時間と密接に関連するのは九月・二月の三つの単元であり、次章で詳しく述べる。それぞれ「図1」のように関連している。

② 学習目標と評価規準を明確にして示すこと

「活動ありき」ではなく「何ができるようになるか」を考えて、指導と評価の一体化を目指した。授業プリント（資料2）には授業の目標およびルーブリック等の評価規準を示した。また評価規準をもとに自己評価・相互評価の機会を設けた。

③ 組織的に授業をすること

教員一人が担当する授業のみで実施するのではなく、学習目標、評価、活動を担当教員で作り、組織的に取り組んだ。¹²⁾ 具体的には、毎単元で目標、展開、評価方法と評価規準をA4用紙一枚程度にまとめた学習指導案（略案）を共同で作成し、共有した（資料3）を参照）。この作業によって、各クラスの実態を共有するとともに、目標や指導事項の共通理解を図った。また、この指導案（年間で

主体的に学習に取り組む態度 探究活動に向かう力	思考・判断・表現				知識・理解	単元	科目名
	論文	発表	調査活動	研究テーマ	探究活動の理解		
知的好奇心を持って問い続け、探究活動に強い関心を持って、意欲的に取り組むことができる。	資料やデータを十分に分析し、研究テーマ・主張・根拠を論理的かつ説得力のある文章でまとめることができる。	研究成果を的確にまとめ、十分な説得力を持たせて、わかりやすく、聞き手を引きつけながら発表することができる。	複数の情報を収集したり、十分なフィールドワーク（インタビュー調査・現地調査・アンケート調査等）をしたりすることができる。	自己のキャリアとの関わりから、テーマに関する調査をふまえて、社会的・学術的に意義のある研究テーマを設定することができる。	探究活動の目的や方法を十分に理解して取り組むことができる。	年間の活動	総合的な探究の時間
知的好奇心を持って、テーマについて探究することができる。	発表内容をもとに論理的な小論文を書くことができる。	調べた情報をまとめ、視覚的にわかりやすいプレゼンテーションができる。	自分（たち）が取り上げたテーマ・論題について調べることができる。	自己のキャリアとの関わりから、社会で起きている問題を知ることができる。	探究のプロセスを理解することができる。	社会問題 新聞投書 ダイバート	国語表現

〔図1〕総合的な探究の時間と国語表現（三単元）で育成を目指す資質・能力の関連表

一 社会問題プレゼンテーション
この単元では、自分が関心のある社会問題について「問い↓主張」の形で数枚のA4用紙を提示しながら発表した。発表方法には「KP法」を用いた。「KP法」とは「紙芝居プレゼンテーション」の略で、

Ⅲ 授業の実際
次に、総合的な探究の時間と密接に関連した三単元について詳細を述べる。この時期は、自己のキャリアを考える前に、世の中や社会で起きている問題に目を向けてほしいという思いから、「社会に目を向けて表現する」というテーマを掲げた。¹⁶

④ ICT機器（スマートフォン）を利活用すること
授業では生徒個人のスマートフォンを利用し、発表に向けた調査、原稿の下書き、清書の提出や投票に用いた。特に令和二年のコロナ禍以降、学校現場でICT環境の整備が急速に進み、スマートフォンやタブレット、各種ソフト・アプリケーション等の利活用が進んでおり、様々な実践報告がなされている。¹⁴しかし本実践時は教室のインターネット環境や個人用タブレットなどのICT機器の整備が進んでおらず、生徒個人のスマートフォンを利用した。¹⁵

一七枚）、学習プリント（年間で三四枚）はすべて校内の共有フォルダに保存し、次年度以降も適宜変更を加えながら利用できるようにした。¹³これにより、学校として組織的な指導を展開することを目指した。

キーワードや図を入れた数枚の紙を黒板に貼りながら発表するものである。¹⁷パソコン、プロジェクター等のICT環境が必要なく、内容を視覚化して発表ができることが大きなメリットである。

(一) 単元の概要

単元名 KP法でプレゼンテーションをしよう

時期 令和元年九月(全六時間)

単元目標

- ・社会問題について、問いを立て、情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめることができる。〔指導事項…ア〕
- ・フリップ(発表シート)を使って、わかりやすく、聞き手をひきつけながら発表することができる。

(二) 授業の展開

①導入

- ・指導者の発表見本(〔資料4〕)で発表の方法やポイントを知る。
- ・「テーマ集」(小論文のテーマ別資料集の目次など)から自分の興味のある分野、自分の進路に関わる分野の社会問題を選ぶ。

②調査活動

- ・選んだテーマについて、スマートフォン、資料集等で調査する。
- ・調べたことを下書きシート(〔資料5〕)を参照¹⁸にまとめる。

③発表準備

- ・調べたことをもとに、フリップの下書き、発表メモ、フリップを作成する。フリップはA4用紙にマジックで記入する。
- フリップには「テーマ」「問い」「主張」「参考文献」の四つを明示するように伝え、議論の整理がしやすいようにした。

※指導上の留意点

- ・問いと主張を正しく結びつけること
- 「なぜか」という問いには理由を書く、「どうすればいいか」という問いには手段を書く、というように問いと主張を結びつけ、論理に一貫性を持たせるよう指導する。現代文考查の記述問題で、理由を聞かれているのに「〜こと。」と答えてしまうように、この対応を理解できていない生徒は多い。下書きシートでは、「問い」と「主張」を「例」を付して上下に繋げ、両者の対応が自分で確認しやすいよう工夫した(〔資料5〕の左下部分を参照)。
- ・わかりやすいように具体例やデータを入れること
- ・テーマについて調べた発表者にとっては理解できる内容でも初めて聞く人には理解しづらいことも多い。具体例やデータを入れることで聞き手が想像しやすいような説明をするように指導した。
- ・文章ではなく図で伝えること
- ・スライド作成の基本である。できるだけ文章量を減らし、グラフや図などで視覚的にわかりやすく示すことを促した。¹⁸
- ・出典(参考文献)を入れること

探究活動における調査の基本である。主張の根拠づけには出典が必要であることの意識付けを図った。そのためフリップにも「参考文献」を一枚入れるように指示した。今回は授業時間の関係でスマートフォンのみで調査をおこなったが、できるだけ信ぴょう性のあるインターネットサイトを挙げるように指導した。

④発表

- ・四～五人のグループを作り、グループ内発表をする。〔図2〕
 - ・机の上にフリップを並べながら発表する。（発表三分＋質疑応答二分）
 - ・聞き手は発表者に質問をし、評価シートをもとに評価をする。代表者が全体で発表する。〔図3〕
- このような発表の機会では質問が重要である。発表者にとっては自分の発表の不十分な点



〔図3〕 全体発表の様子



〔図2〕 グループ内発表の様子

質問のワザ

- ① どういうことですか？（説明）
- ② なぜですか？（理由）
- ③ 具体的には？（具体例）
- ④ 私は〇〇だと思うのですが、あなたが△△だと思うのはなぜですか？（自分の考え）
- ⑤ 本当に〇〇なんですか？（批判）

〔図4〕 掲示した「質問のワザ」

を理解できたり、気づいていない視点を得られたりする。聞き手にとっては質問をする前提で聞くことで集中力が増す。よって一人一つは質問をするように伝えた。ただ、生徒の多くは質問の方法を理解していない。そこで「図4」のような「質問のワザ」を黒板に貼り出して参考にするように促すと、比較的スムーズに質疑応答がおこなわれた。

また、目標に対応した評価項目を基にした相互評価（「資料2」参照）によって代表者を選出した。代表者は次の時間に全員の前で発表した。

⑤小論文

- ・発表内容を六〇〇字程度の小論文の形でまとめる。

（三）成果と課題

① 探究のプロセスを短時間で実感することができたこと
下書きシートにフォーマットに従って発表準備をすることで、問い立て→調査→まとめという探究のプロセスを実感することができた。
問い立てについては、下書きシートを用いて何度も個別にフィードバックをおこなった。この経験を探究活動に活かすことができる。

《生徒の発表テーマ（一部）》

- ・ ペットの殺処分をゼロにするためにはどうすればよいか。
- ・ 高齢者ドライバーの事故を減らすためにはどうすればよいか。
- ・ 児童虐待を減らすための方法はなにか。
- ・ 格差社会に対して何をしなければならぬのか。
- ・ LGBTの人に対する受け入れ方は日本と海外でなぜ違うのか。

② 社会問題について調べる経験となったこと

「LGBT」「経済格差」「若者の投票率」「学力低下」などの社会問題について詳しく調べることは初めてであった生徒も多かった。

《生徒のふりかえり》

- ・ 世の中にはこんなにたくさんの社会問題があると気づいた。
- ・ 一から自分で調べてみたら気づくことがたくさんあって、気づいたときが嬉しかったし、みんなに言いたいなと思いました。
- ・ 発表した時に、もっと調べてまとめて発表すればよかったと思いました。その他にもたくさんの方省点があったので、総合の時に発表するときには気をつけたいと思いました。

③ K P 法によって効果的な発表ができたこと

- ・ 今回採用した K P 法の発表形式には次のような利点があった。
- ・ 発表内容が整理できること

自分の考えや調査内容を整理できることも利点であった。¹⁹ すべての発表が、何を言いたい発表なのか明確にわかるものであった。

- ・ 発表内容が視覚的でわかりやすいこと

聞き手が初めて聞く内容でも、視覚的でわかりやすいフリップがあるため理解しやすかった。また、K P 法ではすべてのページが貼り出してあるため、内容の軌跡、議論の流れもわかりやすかった（プレゼンテーションソフトでは前のスライドが表示されない）。

- ・ 発表者が話しやすいこと

資料提示のないスピーチでは二分間も話せない生徒でも、フリップを提示しながら話すとき規定時間の三分を超えるほどだった。また、聴衆を終始見なくてもよいこと、フリップ作成の過程で発表への心構えが十分にできていることから、発表者は比較的緊張しなかった。

《生徒のふりかえり》

- ・ 初めて K P 法というのをやってみて、今までの発表と違い見出しが出ていたので発表がしやすかった。何を大きく書くのか考えることもあったので大変だったが、図も書けたし有効に使えたと思う。
- ・ またこの授業のあと、総合のゼミですぐ K P 法をやった。国語表現で経験していたので上手に役立てることができた。

このように総合的な探究の時間でも同じ形態で発表をさせているゼミもあった。

二 新聞投書

前単元に引き続き社会への意識を持たせながら、読み手を意識した文章を書くことに焦点を当てる。田中宏幸は「課題設定や取材」の段

(Google フォームに提出された原稿データをプリントにまとめる作業は、原稿を打ち込む必要がなく非常に簡易である。)

⑥ 「最も共感した投稿」を選んで、理由とともにGoogle フォームに投票する。直後に結果発表。

⑦ 指導者の助言を受けて修正し、Google フォームに清書を提出する。

⑧ 清書のチェックを受けた者から、任意の新聞社にメールで投稿する。投稿には個人情報が必要のため、投稿の強制はしていない。

(三) 成果と課題

① 社会問題に対して意見を持つきっかけとなったこと

社会に目を向け、世の中で起きている問題に対して意見を発信する経験を通して、社会問題に対して意見を持つきっかけとなった。この経験を総合的な探究の時間のテーマ設定にも活かしていきたい。

《生徒のふりかえり》

・今の社会の問題について、改めて考えさせられた授業だった。これから僕たちには深く考えなければならないことがたくさんあると、みんなの投稿を読んだり、自分の投稿を考えたりして感じた。

② 読み手への意識が明確に出たこと

これまでの課題では、読み手が教員に限られていたため読み手への意識が出にくかったが、スマートフォンを使ってメールで新聞社に送るという今回の活動では、読み手への意識が出たと思われる。

《生徒のふりかえり》

・今まで何も考えずに自分の伝えたいことだけを書いていたけど、自分が書いたものが全国の知らない人達に読んでもらえるかもしれないと思うと、今まで以上に内容をいろんな人に伝わるようにしないとイケないとか、最後まで内容が分かりやすいものになっているのかとか気をつけることがたくさんで難しかったです。

・授業の枠を超えて実際に送るというのが初めてで不安だったけど上手に書けたかなと思います。また挑戦したいなと思いました。

上記二つ目のふりかえりについて、これまでもエッセー、短歌、俳句の投稿など、作品を応募する活動はおこなってきたっており、「実際に送るとというのが初めて」ではない。しかしそれらは教員が集約して送ってきたため、自分の意見を発信する実感を持てなかったのだろう。自分で送るといふ経験は生徒にとって新鮮であり、有意義であった。

③ 教員とは異なる評価者に評価される経験となったこと

今回は八四名中、四名の投書が掲載され、掲載された生徒は大変喜んでいった。興味深かったのは、掲載された原稿は指導者が優れているとみなしたもののばかりではなかったことである。文章の構成や論理性よりも、高校生ならではの主張や着眼点が評価されたようだ。結果として教員とは異なる評価軸で評価される貴重な経験となった。

《新聞掲載された投書（見出し）》※すべて令和元年の記事

・「いじめは悪い」 忘れた先生たち」（読売新聞、十月二日）

・「ポイント還元策 不平等さを懸念」（読売新聞、十一月十三日）

・「落書きと芸術の違い理解を」（朝日新聞、十一月十四日）

・「ブラック」多く社会出るの怖い」（読売新聞、十一月十九日）

④ 充実した批評、相互評価が不十分であったこと

ふせんのなかには内容の改善につながるようなコメントもあったが、生徒同士の気兼ねもあって当たり障りのないものが多く、批評としては不調であった。コメント内容に制限をかけるなど、先行実践等を参考にしながら、²⁴ 今後は改善したい。また相互投票で「共感」を規準としたことは新聞投書欄の性質上、適切ではなかったと考えている。

三 デイベート

社会問題をテーマに論拠の妥当性を話し合うことに焦点を当て、先行研究²⁵を参考にしながらいベートをおこなった。生徒は一年次の「産業社会と人間」において「社会への視野を広げること」「他者と協働して取り組むこと」を学習目標として年次全体でいベートに取り組んでいる。その際、教科横断を意図して国語総合では論理の組み立て方を学んだ。そこでは「三点ロジック」²⁶を使って根拠立てた意見文の書き方を学んでいる。

なお、本稿では総合的な探究の時間との関連として、いベート小論文について詳述する。

（一）単元の概要

単元名 デイベートをしよう

時期 令和元年十一月～十二月（全十一時間）

単元目標

・ 論拠の妥当性を判断しながら話し合うことができる。（指導事項…イ）

・ 三点ロジックを使って、説得力のある主張ができる。

（二）授業の展開

① いベートの説明、三点ロジックの復習

② メモのとり方、尋問の方法、信ぴょう性のある情報の集め方

③ ミニいベート（三人のグループ内でいベートを練習）

④ いベート一回戦、二回戦²⁷

⑤ 「超いベート」²⁸

⑥ いベート小論文

いベート小論文とは、任意のいベートテーマについて自分の意見を六〇〇字程度で述べるものである。いベートの経験を活かすため「三点ロジックを用いた論理的な根拠づけをすること」「反対意見に対する反駁を入れること」の二点を特に指導し、評価の観点とした【資料7】。さらに、総合的な探究の時間の論文執筆に活かすことを念頭に次の内容を指導した。

※指導上の留意点

・ 「パラグラフ・ライティング」の書き方で書くこと

「パラグラフ・ライティング」とは、一つの段落（＝パラグラフ）で一つの話題を扱い、複数の段落を組み合わせて論理的に文章を構成する方法である。渡辺哲司らが指摘するように日本の大学では標準的な書き方となっており、高校の英語教育では指導されることもあるが、高校の国語教育では指導されることがほとんどない。しかしパラグラフ・ライティングを学ぶことはライティング指導の高大接続という視点のみならず、読み手にとって読みやすい文章の組み立て方を身につけることにもつながり、有益であると考えている。

よって今回はパラグラフ・ライティングの解説プリント（【資料8】）を用いて、この書き方で書くように指導した。

・適切な引用をすること

論文執筆の際に、書籍や論文、資料等から引用することは必須である。引用の際は、自分の文章と引用の文章を明確に区別すること、出典・引用元を明らかにすることを指導した。

（三）成果と課題

①総合的な探究の時間につながる小論文が書けたこと

小論文では、ポイントとして指導したパラグラフ・ライティングや引用の方法を適切にふまえた作品もあった（【資料9】）。総合的な探究の時間の論文執筆に活かせるスキルである。

②議論の質が高いディベートとなったこと

前年度のディベートと比べて議論の質は大幅に上昇しており、論理の妥当性を判断する力を養うことができたと感じている。

③指導事項が多すぎたこと

今回の単元では指導事項が多すぎたことが課題である。パラグラフ・ライティングや引用の方法は小論文の評価の観点（【資料7】）ではないもので、生徒のなかには消化しきれなかった者もいた。

IV おわりに

本稿では総合的な探究の時間との教科連携を図った国語表現の年間授業実践のうち、社会問題プレゼンテーション、新聞投書、ディベートの三単元について述べてきた。本実践は社会に目を向け、探究の過程をたどりながら表現する力をつけていく授業であり、ここで身につけた力は総合的な探究の時間や将来に役立つものだと考えている。

この授業は年間を通して発表を繰り返したり、小論文を何度も書いたり、本校の生徒にとって大きい負荷のかかる内容であったと思われる。しかし生徒は非常に意欲的に取り組んでおり、一定の手応えを感じた。

《生徒の一年間のふりかえり》

・他のどの授業よりも受験に必要な知識を学べた。書く・話す・伝える・聞く力は確実に伸びていると思う。皆まじめで、いろいろと学ぶことができた。

・社会に出たときに役に立つことばかり教えてもらったし、何よりも楽しく授業が受けられた。

・とても内容の濃い授業だった。とても意味がある授業で、将来

に役立てたい。自分と向き合うことで、知らなかったことも知れた。
・最初は自分の意見を他人に発表したり話し合ったりいやだなあ
と思っていた。けどいつからかめっちゃ楽しくなって、今考えると、
自分の意見を他人に伝えるのが好きになっている。

ただし、この国語表現の授業は総合的な探究の時間のためにおこ
なっているわけではない。教科横断の視点による授業でも、国語科の
特質を活かし、国語科という教科でこそ身につけられる資質・能力を
育みながら、それぞれの学びが往還することが重要である。

本実践の次年度、筆者は一時的に授業から離れることになったが、
その間の授業でも、本実践の指導案や学習プリントをもとに、さらに
改善され、指導が進められていると聞く。これからも教科横断の視点
を活かした授業が組織的におこなわれることを目指したい。さらに今
後は「現代の国語」等の共通履修科目や他教科・他科目でも、「探究」
に焦点を当てて教科横断的な授業展開がなされることを目論んでいる。

注

- 1 『高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）解説総則編』四頁
- 2 『高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）解説 総合的な探究の
時間編』二六、一三頁
- 3 井上雅彦は総合的な学習の時間を支える力を整理した上で、その
うち国語科では「言語の基本機能」「コミュニケーション能力」「情
報処理、活用能力」「メディアの活用能力」について、「伝え合う
力を高める」ことを意図した三年間の学習指導計画にしたがって
授業を展開することにより、身につけさせることが可能であると
している（井上雅彦（二〇〇八）『伝え合いを重視した高等学校国
語科カリキュラムの実践的研究』溪水社、第5章）。
- 4 八田幸恵（二〇一五）『教室における読みのカリキュラム設計』日
本標準、第Ⅱ部において、福井県立藤島高等学校、福井県立若狭
高等学校における渡邊久暢の単元「こころ」の実践が収められて
いる。
- 5 井上志音（二〇一七）『教科横断を導入した国語科探究学習の実践』
『日本私学研究所紀要』第五三号
- 6 田中宏幸（二〇一九）『高等学校「国語表現」の授業をどう考える
か』『日本語学』五月号、明治書院には、国語表現に関する実践研
究文献リストが掲載されている。
- 7 答申では「国語による主体的な表現等が重視された授業」、「話
すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習」が「十分におこ
なわれていない」とある。（中央教育審議会「幼稚園、小学校、中
学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必
要な方策等について（答申）」平成二八年二月二日）
- 8 新科目「現代の国語」では、「読むこと」の授業時数が一〇～二〇
単位時間程度とされるのに対し、「話すこと・聞くこと」は二〇～
三〇単位時間程度、「書くこと」は二〇～四〇単位時間程度である。
文部省初等中等教育局長通知「総合学科について」平成五年三月
二二日
- 9

- 10 二年次生（平成三〇年度入学生）は「総合的な探究の時間」の移行措置（先行実施）の対象ではなく、科目名は「総合的な学習の時間」だが、本校の授業内容を鑑み、本稿では「総合的な探究の時間」に統一して表記する。
- 11 本校まなび支援部が作成したオリジナルテキスト。章立ては「研究テーマの決め方」「情報の集め方」「論文の書き方」「論文見本」「過去の優秀論文」などで、後述の「パラグラフ・ライティングの書き方」「引用の方法」も含めて約五〇ページにわたる。
- 12 本実践は年間を通して、筆者も含めた三名の担当教員で共同で作りに上げたものである。
- 13 高木展郎はカリキュラム・マネジメントの観点から、学校や教科のグランドデザインに基づいた学習指導案を学校全体で作成することを説いており、その考えを参考にした「高木展郎（二〇一九）『評価が変わる、授業を変える』三省堂、一五六頁」。
- 14 たとえば、野中潤編著（二〇一九）『学びの質を高める！ ICTで変える国語授業』明治図書出版などを参照。
- 15 「BYOD (Bring Your Own Device) = 自宅や個人の端末を学校に持ち込んで利用すること」の発想である。スマートフォンを持っていない生徒には教室に有線LANで繋いだ貸し出し用パソコンを使用させた。
- 16 新学習指導要領「国語表現」の目標には「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」とあり、言語活動例には実社会に直結する活動が多く取り上げられている。
- 17 川嶋直（二〇一三）『KP法 シンブルに伝える紙芝居プレゼンテーション』みくに出版を参考にした。
- 18 六、七月実施の前單元「NZについてのポスターセッション」でもポスター作成の際に図や画像を用いるよう指導している。
- 19 川嶋（前掲著、八四頁）によると、「KP法」というネーミングは思考整理法という意味で「KJ法」を意識しているようである。
- 20 田中宏幸（二〇一六）『書くこと』の授業づくりの基本的考え方」浜本純逸監修、田中宏幸編『中学校・高等学校「書くこと」の学習指導 実践史をふまえて』溪水社、二〇頁
- 21 筑波大学附属駒場中学校・高等学校における澤田英輔の実践（ブログ『あすこまっ！』）を参考にした。
- 22 ・「はじめての「新聞の読者投稿を書く」授業、わかったことと反省点。」（二〇一七年）<https://askomaiinfo/2017/12/25/5671>
・「新聞の読者投稿を書く授業、2年目はこんな風になりました。」（二〇一九年）<https://askomaiinfo/2019/02/12/7125>
- 22 多くの生徒が投書欄の書き手には比較的高齢者が多く、若い世代が少ないことに気づいた。そのことから生徒のなかでは一〇代である自分が投稿すると掲載されやすいのではないかと期待が高まった。
- 23 Google フォームとは、Google が提供している、アンケートや小テストなどの作成・分析ができるウェブ上のサービスである。
- 24 富谷利光は「国語表現Ⅰ」で投書の授業実践をしており、投書の推敲の場面で「批評者は反論をする（反対意見を書く）こと。で

きない場合は質問をする」という指導をしている「富谷利光

(二〇〇六)『評価規準と単元化でつくる達成感のある国語表現の授業』教育出版、第3部第1章。今後の指導に活かしていきたい。

特に佐藤喜久雄・田中美也子・尾崎俊明(一九九四)『中学・高校教師のための教室ディベート入門』創拓社、池田修(一九九五)

『中学校国語科ディベート授業入門』学事出版を参考にした。

26

「三角ロジック」とも言い、「主張」「事実」「理由付け(その事実からなぜ主張が導き出せるかという説明)」の三つの要素による論理の組み立て方である。三点ロジックについて、前任校の定時制高校における筆者の研究発表は『全国高等学校国語教育研究連合会第五〇回研究大会兵庫大会大会集録』を参照。

27

ディベートの論題は以下の六つである。提示した論題候補の一覧から生徒の希望をもとに採用した。

・選択的夫婦別姓を法的に認めるべきである。

・全世帯を対象に高等教育の授業料を無償化すべきである。

・選挙権の年齢を一六歳に引き下げるべきである。

・企業は男性の育児休業を義務付けるべきである。

・積極的安楽死を法的に認めるべきである。

・出生前診断(遺伝学的検査)を禁止すべきである。

28

「超ディベート」は、ヘーゲルの弁証法とフッサールの現象学の方法をもとにした苦野一徳の考えを参考にした「苦野一徳(二〇一四)『教育の力』講談社現代新書、二二〇～二二九頁」。「肯定」か「否定」か、AかBか、何が「正解」か、ではなく、互いの意見を考

え合わせた上で、できるだけ皆が納得するような「共通了解」「納得解」。「第三のアイデア」を出すというものである。ディベート終了後、班を半分に分けて、対立していた班と合流し、「現状の問題点」「その解決策(肯定側のプランをもとに)」「その解決策の問題点(否定側の意見をもとに)」「第三のアイデア」を話し合った。

29

渡辺哲司・島田康行(二〇一七)『ライティングの高大接続』ひつじ書房、第12章および「付録 パラグラフ・ライティングの指導事項」を参照。

令和元年度 2年次 国語表現(2単位、28人×3講座) 年間指導表							※実施後との	
	日付	曜日	回数	単元目標～テーマ～	領域	指導事項	学習活動	備考、教科書頁【評価】
4	4/11	木	1	表現することの難しさを知る 聞き手を引きつけるスピーチ をすることができる ～「日本」を紹介するスピー チをしよう～	話す・聞く	エ 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して効果的に話したり書いたりすること。	伝言ゲーム、ペアで連想したものゲーム 聞き手を引きつけるスピーチに必要なスキルを考える土練習等	p.118～
	4/18	木	2				スピーチ構想メモ作り	
	4/23	火	3				スピーチ①（前半14人）	【評価】スピーチ
	4/25	木	4				スピーチ②（後半14人）	【評価】スピーチ
5	5/7	火	5	読み手を引きつけるエッセー を書くことができる ～「17歳からのメッセージ」 に応答しよう～	書く	ウ 主張や感動などが効果的に伝わるように、論理の構成や描写の仕方などを工夫して書くこと。	作文プリント（正しい文を書く） エッセーを読み、読み手を引きつけるエッセーとはどのようなものかを考える	p.9～、p.164～
	5/14	火	2				構想メモ、下書き	
	5/23	木	3				下書き、推敲	
	5/28	火	4				清書	【評価】提出原稿
	5/30	木	5				小論文を書く	p.30～
	6/4	火	1				小論文を書く	
6	6/11	火	2	接続立てて小論文を書くこと ができる～「異文化」をテーマ にして～	書く	ウ 主張や感動などが効果的に伝わるように、論理の構成や描写の仕方などを工夫して書くこと。	小論文を書く	【評価】小論文
	6/13	木	3				小論文を書く	
	6/25	火	4				NZポスターをつくる	p.148～
	6/27	木	5				NZポスターをつくる	【評価】ポスター
7	7/9	火	7	図や写真を用いて編集して、 効果的に表現することができる ～NZについてのポスターセッ ションをしよう～	話す・聞く	ア 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめるたり深めたりすること。	ポスターセッション（講座内）	
	7/16	火	8				ポスターセッション（講座会合）	会場は会議室
8	夏季休業							
9	9/5	木	1	※本稿Ⅲ一 社会問題について、探求のプロ セスに導き込んで、効果 的に発表することができる ～KIP法でプレゼンをしよう～	話す・聞く	ア 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめるたり深めたりすること。	読書、準備 準備（下書きシート完成）	p.132～
	9/10	火	2				準備（フリガシ記入）	
	9/12	木	3				グループ内発表	【評価】発表準備シート
	9/17	火	4				代表者発表	
	9/19	木	5				社会問題についての小論文を書く	【評価】小論文
10	9/24	火	6	※本稿Ⅲ二 社会や身の回りのことについて、 伝わる意見文を書くことが できる。ノ下書きを推敲し 合せて、よい作品をつくり上 げることができる ～新聞投稿をしよう～	書く	オ 書いた文章を読み返して読みかた、表現の特色やひらき、自分の表現や感動に気づき、自分の考えや感情を豊かにすること。	新聞投稿を読み、分析する 分析をいかして、下書きを書く 下書きを推敲し合う 寄稿を投稿する	【評価】新聞投稿消滅
	10/3	木	1				新聞投稿を読み、分析する	【評価】新聞投稿消滅
	10/8	火	2				分析をいかして、下書きを書く	
	10/15	火	3				下書きを推敲し合う	
	10/17	木	4				読書について	
	10/31	木	1				読書について	
	11/5	火	1				導入、3点ロジック、尋問の方法	p.175～
11	11/7	木	2	※本稿Ⅲ三 読者の立場を判断しながら 話し合うことができる ～ディベートをしよう～	話す・聞く	イ 相手の立場や異なる考えを察しては話題を解決するために、論拠の妥当性を判断し合うことが話し合うこと。	メモを取る練習、ミニディベート準備	
	11/12	火	3				ミニディベート本番	【評価】準備シート
	11/14	木	4				紙分け、ディベート準備	
	11/19	火	5				ディベート準備	
	11/21	木	6				ディベート①②	
	11/26	火	7				ディベート③、ディベート準備	【評価】準備シート
12	11/28	木	8				ディベート準備	
	12/3	火	9				ディベート④⑤	
	12/5	木	10				ディベート⑥、「超ディベート」	【評価】小論文
	12/17	火	11				ディベート小論文	
	12/19	木	1				読書について	
	12/24	火	2				読書について	p.118～
	冬季休業（読書 ビブリオ用語集）							
1	1/14	火	1	目的や場に応じて、効果的に 話すことができる～新書ビブ リアバトルをしよう～	話す・聞く	エ 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して効果的に話したり書いたりすること。	グループ内予選	【評価】準備シート
	1/16	木	2				決勝戦	【評価】決勝出場者
	1/21	火	3				自己PR材料づくり・長所さがし	p.65～
	1/23	木	4				自己PR作文	
2	1/28	火	5	自分のよさを効果的に相手に 伝えることができる～模擬面 接をしよう～	話す・聞く	エ 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して効果的に話したり書いたりすること。	自己PR作文、面接準備	【評価】自己PR作文
	1/30	木	6				面接準備、面接ペア練習	p.75～
	2/4	火	7				模擬面接①	【評価】模擬面接
	2/6	木	8				模擬面接②	【評価】模擬面接
	2/13	木	9				模擬面接 予備 まとめ	【評価】模擬面接
	2/18	火	10				志望理由書 構想メモ	p.72～
	2/20	木	11	自分の過去を振り返り、将来 を考えて文章で表現すること ができる～志望動機書を書こう～	書く	ア 話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめるたり深めたりすること。	志望理由書	
	2/25	火	12				志望理由書 1年間のふりかえり	【評価】志望理由書

2年次 国語表現 プリント④ 社会問題プレゼン 評価シート

2年（ ）組（ ）番 名前（ ）

【目標】

- ・社会問題について、情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめることができる。
- ・フリップを使って、わかりやすく、聞き手をひきつけながら発表することができる。
- ・発表を聞いて、質問をすることができる。

【自己評価ルーブリック】

	情報のまとめ	発表	質問
A	社会問題について、信ぴょう性のある情報を収集し、問いと主張の形で、一貫性を持ってまとめることができた。	3分間を使い切り、聞き手をひきつけながら発表することができた。	1人の発表に対して、平均して、2つ以上の質問をすることができた。
B	社会問題について、情報を収集し、問いと主張の形でまとめることができた。	2分以上使って、聞き手がある程度ひきつけながら発表することができた。	1人の発表に対して、平均して、1つ質問をすることができた。
C	社会問題について、情報を収集したが、問いと主張の形にまとめられていなかった。	1分以上使って、発表することができた。	発表に対して、ほとんど質問ができなかった。

(1) 発表を聞いて、メモを取ろう

①発表者（ ）さん テーマ（ ）

内容メモ	よかったところ	評価 ・問いと主張に説得力がある (4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) 点 ・聞き手を引きつけた発表をしている (4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) 点 ⇒合計 () 点
------	---------	---

②発表者（ ）さん テーマ（ ）

内容メモ	よかったところ	評価 ・問いと主張に説得力がある (4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) 点 ・聞き手を引きつけた発表をしている (4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) 点 ⇒合計 () 点
------	---------	---

③発表者（ ）さん テーマ（ ）

内容メモ	よかったところ	評価 ・問いと主張に説得力がある (4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) 点 ・聞き手を引きつけた発表をしている (4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) 点 ⇒合計 () 点
------	---------	---

【ふりかえり】

(2) 他の人の発表を聞いて、よかったこと、真似したいこと。

(3) 自分の発表について、情報のまとめ方や、発表方法に関して、うまくいったこと、課題。

2 年次国語表現 指導案① 社会問題 KP 法プレゼン 【19 年 9 月 5 日（木）～】

単元名	フリップを使ってプレゼンテーションをしよう〔テーマ：社会問題、世界の課題〕
目標	・社会問題について、情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめることができる。 ・フリップを使って、わかりやすく、聞き手をひきつけながら発表することができる。 ・発表を聞いて、質問をすることができる。
展開	【展開】 9/5（木）社会問題について、知る、調査する 9/10（火）プレゼン準備① 9/12（木）プレゼン準備② 9/17（火）グループ内発表会 9/19（木）代表者発表 9/24（火）小論文 【詳細】 9/5（木） ①説明 ・社会問題について、知るべきである。 （大学、短大、専門学校入試等でも頻出） 9/10（火） 9/12（木） ・プレゼン準備 ・フリップ記入まで終われば、発表練習 ・発表練習も満足した人は、別途プリント学習 ※指導上の留意点 ①問いと主張が結びついているか？ ここが結びつかないと、論理の一貫性がない。 （例） 「なぜか？」→理由を答える 「どうすればよいか？」→手段を答える ②主張（解決策）は、「個人の努力」ではなく社会的な視点があるか？ （例） 「少子化をとめるには？」 →△「子どもをたくさん生みます」 →「子育てしやすい環境を構築することが必要」 ③わかりやすく発表するために、具体例、データ、数値を入れていくとよい。 ※「ニュージーランドポスターセッション」を参考に。
評価	成績評価対象・・・下書きシート（プリント⑬） A 社会問題について、信ぴょう性のある情報を収集し、問いと主張の形で、一貫性をもってまとめることができている。 B 情報の信ぴょう性△・論理の一貫性△ C 情報の信ぴょう性×・論理の一貫性× D 発表なし

7 ・働きやすい職場環境 ・待機児童の解消 (保育園問題)	4 合計特殊出生率 1.44 (2016年)	1 テーマ 少子化
8 参考文献 ・「合計特殊出生率について」(厚生労働省) ・「続く少子化 政策のズレ見直しを」(朝日新聞、2019年6月25日)	5 労働人口の減少 ↓ 社会保障などの維持が困難	2 問い 少子化をとめるにはどうすればよいのか？
	6 主張 子育てしやすい環境をつくるが必要	3 日本人の出生率の推移 124.7 116.0 92.7 平成元年 4 7 10 13 16 19 22 25 28 30 総務省「人口動態調査」(2019年)

2年次 国語科 プリント④ 社会問題プレゼンテーション 2年(6)組(男) 名 姓 () 【目標】 社会問題について調べたことをもとに、フリップをつかってプレゼンテーションができる。	【フリップ下書き・発表メモ】 フリップは4枚以上。 テーマ 問い 主張 参考文献 の4枚は必ず入れる。																					
【やり方】 ①「キーワード」からテーマを選ぶ。 ②テーマについて、スマホなどで調べる。 ③「テーマ」「問い」「経過・データ」「主張」「参考文献」の順でまとめる。 ④フリップをつくる。(A4用紙とマスキング) ⑤グループ内で発表(3分間) + 質疑応答(2分間) 【調べたこと】	<table border="1"> <thead> <tr> <th>番号</th> <th>フリップ</th> <th>内容で記述する内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>日本の貧困</td> <td>世帯の収入が20万円未満の世帯は増加傾向にある。生活の不安定化が原因で貧困が増えている。④は国別比較、⑤は原因、⑥は対策、⑦はまとめ。</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>問い</td> <td>今の問題は、外部要因と内部要因の両方がある。子どもに精神的ダメージを与えている。</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>7人に1人</td> <td>2019年の調査によると、7人に1人が貧困状態にある。OECD加盟国の中でも最も高い水準にある。</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>経過</td> <td>1985年から2005年までのデータ。少子化が進むにつれて、貧困率も増加傾向にある。④は原因、⑤は対策、⑥はまとめ。</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>主張</td> <td>貧困対策の中心は、貧困の原因を減らすこと。貧困の原因は、少子化による労働力の減少、高齢化による社会保障の負担増、格差の拡大による生活の不安定化などがある。</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>参考文献</td> <td>「国別比較」(OECD加盟国の比較)、gooddo、国別比較、gooddo</td> </tr> </tbody> </table>	番号	フリップ	内容で記述する内容	1	日本の貧困	世帯の収入が20万円未満の世帯は増加傾向にある。生活の不安定化が原因で貧困が増えている。④は国別比較、⑤は原因、⑥は対策、⑦はまとめ。	2	問い	今の問題は、外部要因と内部要因の両方がある。子どもに精神的ダメージを与えている。	3	7人に1人	2019年の調査によると、7人に1人が貧困状態にある。OECD加盟国の中でも最も高い水準にある。	4	経過	1985年から2005年までのデータ。少子化が進むにつれて、貧困率も増加傾向にある。④は原因、⑤は対策、⑥はまとめ。	5	主張	貧困対策の中心は、貧困の原因を減らすこと。貧困の原因は、少子化による労働力の減少、高齢化による社会保障の負担増、格差の拡大による生活の不安定化などがある。	6	参考文献	「国別比較」(OECD加盟国の比較)、gooddo、国別比較、gooddo
番号	フリップ	内容で記述する内容																				
1	日本の貧困	世帯の収入が20万円未満の世帯は増加傾向にある。生活の不安定化が原因で貧困が増えている。④は国別比較、⑤は原因、⑥は対策、⑦はまとめ。																				
2	問い	今の問題は、外部要因と内部要因の両方がある。子どもに精神的ダメージを与えている。																				
3	7人に1人	2019年の調査によると、7人に1人が貧困状態にある。OECD加盟国の中でも最も高い水準にある。																				
4	経過	1985年から2005年までのデータ。少子化が進むにつれて、貧困率も増加傾向にある。④は原因、⑤は対策、⑥はまとめ。																				
5	主張	貧困対策の中心は、貧困の原因を減らすこと。貧困の原因は、少子化による労働力の減少、高齢化による社会保障の負担増、格差の拡大による生活の不安定化などがある。																				
6	参考文献	「国別比較」(OECD加盟国の比較)、gooddo、国別比較、gooddo																				
調べたことメモ (出典を必ず記入すること。調べたことのあるサイトを書くこと) 絶対的貧困：人間らしい生活の必要最低限の基準が満たされていない状態 相対的貧困：国や社会、地域など、その国の平均収入に比べて OECD加盟国の中で最も高い水準 原因：少子化による労働力の減少、高齢化による社会保障の負担増、格差の拡大による生活の不安定化などがある。 対策：少子化対策、高齢者への支援、格差の拡大を抑制する政策など まとめ：貧困対策の中心は、貧困の原因を減らすこと。 1985 → 1990 → 1995 → 2000 → 2005 → 2010 → 2015 → 2019 10.4 17.4 12.8 13.1 13.4 16.5 16.7 14.2 15.7 16.3 13.9 問い (問い：少子化をとめるにはどうすればよいのか?) 原因 (原因：少子化による労働力の減少、高齢化による社会保障の負担増、格差の拡大による生活の不安定化などがある。) 主張 (主張：子育てしやすい環境をつくる必要がある。)																						

国語表現「新聞投書」クラス内投稿フォーム

必須

愛読番号を選択してください。

選択

名前（漢字・フルネーム）を入力してください。

回答を入力

テーマ（タイトル）を入力してください。

回答を入力

投書の文章を記入してください（メモアプリにまず記入して、それを貼り付けるとやりやすいです）。

回答を入力

送信

	根拠づけ	反対意見に対する反駁	字数
A	主張に対して論理的な根拠づけがなされている	反駁が説得力を持ってなされている	字数が560字以上ある
B	根拠づけをしようとしている	反駁しようとしている	
C	根拠づけがなされていない	反駁していない	字数を満たしていない

【資料8】「パラグラフ・ライティング」解説プリント

「パラグラフ・ライティング」とは

「パラグラフ・ライティング」とは、「一つの段落（＝パラグラフ）で」「一つの話題（トピック）を扱い、複数の段落を組み合わせて論理的に文章を構成する方法である。読み手・読みにやすく、書き手も読みやすい・研究論文や企画書を書く際は、この手法が多く用いられる。

「パラグラフ」…意味のまとまりをもった形式段落のこと。

①文種は、複数の「パラグラフ」によって成り立っている。

②一つの「パラグラフ」は、内容（言）は「一つ」だけである。

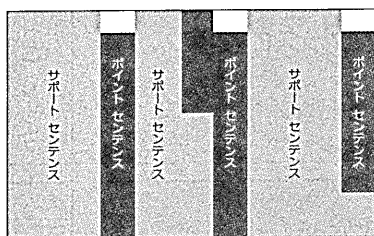
③一つの「パラグラフ」のなかには…

・パラグラフの内容を一文論理的に教える「ポイント・センテンス」がある。

・「ポイント・センテンス」の説明や根拠、具体例などを書いた「サポート・センテンス」がある。

※「ポイント・センテンス」は、原則として「パラグラフ」の冒頭におく。

（例）三つのパラグラフによって成り立っている文章



パラグラフ

【例】ポイント・センテンスに線を引く。

学校の昼食は弁当と給食のどちらがよいだろうか。私は給食のほうが望ましいと思います。給食は弁当に比べると効率がよい。弁当の場合、毎朝、朝食の準備や出かける支度で忙しい時間帯に調理したり弁当箱に詰めたりする手間がかかる。前日から材料を買っておく必要もあるだろう。一方、給食ならば、全校生徒の分を一度に調理し、いっせいに配膳するので、効率がよい。材料をまとめて購入することによって、費用を安く抑えることもできる。

また、給食は栄養面において優れていて、弁当は家庭に上つては栄養バランスが十分に考慮されていないこともあり得る。だが、給食はプロの栄養士が献立を決めるので、そういう問題は起らない。調理したての温かい状態の味がよく、成長期の体に必要な栄養をよく与えられたメニューでおいしく摂取することができる。

以上の理由から、弁当よりも給食のほうが学校の昼食としてふさわしいのである。

※【例】は想像。改訂版より一部改変。

【資料9】「子育て小論文」生徒作品

企業は男性の育児休業を義務づけるべきなのか

企業は男性の育児休業を義務づけるべきなのだろうか。私は、義務づけるべきではないと考える。理由は二つある。

一つ目は、義務化で強制するのはおかしいからだ。『男性の育児休業』の著者である武石恵美子は「本来育児は取りたい人が取る権利であり、誰かが取りなさいと強制するものではない」「女性にも義務づけられていない育児をなぜ男性だけ義務化するのか」と述べている。たしかに、義務化にすることで男性は育児休業を取りやすくなるだろうし、今まで育児に興味がなかった男性も育児をするかもしれない。しかし、武石恵美子が述べたように、収入に不安があるのに義務化することで育児休業を拒めないというのは問題なのではないだろうか。

二つ目は、育児を義務づけたからといって育児をするとは限らないからだ。たしかに、育児を取れたら育児をがんばる人もいて、夫婦仲もよくなるだろう。しかし、平成三十年のコネクトによると、育児中の夫の三人に一人が家事、育児が二時間以下であった。このように、現在自主的に取った育児ですら育児をきちんとやっている人は少ないのに、義務化して強制したところで実際に家事や育児をする人は少ないのではないか。それでは、義務する意味がない。

以上のことから私は、企業は男性の育児休業を義務づけるべきではないと主張する。